

1 経験と今振り返って感じること

(1) 出発前における精神面・語学面・日本との連携

ア 要請内容に沿う活動ができるように、専門知識を高めたりできるだけ多くの資料を集めたりした。

・数年間の現場経験があるとはいえ、任国での業務は、現地の教員への技術指導である。自分の専門的技術への不安がないとは言えない。そのため、専門的知識を高めるために、情報や資料収集を行った。

イ 任地から日本の所属校へ H.P.のアップやビデオ便りなどを通して、定期的に通信を送り交流しようと計画し、またその準備を進めた。

・現職で参加する一つの良さは、所属校とリアルタイムで交流を行うことができることだと思う。そのため、電気機器類やその事情の悪い現地を想定しながら、所属校と交流できる方法を考え、その準備を行った。

(2) 派遣中における日本との連携(上記の項目を受けて)

ア 要請内容と一致した活動を求められるとは限らない。

協力隊の業務は、任国からの要請が上がり、その期待の答えるという形で決定している。しかし、要請を出した時点から、実際に隊員が派遣されるまでには、募集・選考・訓練などの過程を経るために時間ログがある。そのため、実際に要請した担当者がその職場にいなかったり、事情が変わっていたということも起こる。また要請を上げたのは中央の役人で、実際に派遣されるのは地方の各部署だったりすると、その必要認識が異なっている場合もある。

また、日本の研究専門誌や実践本などは、その歴史的な変遷や課程を経て今にあるものだから、任国の実態には合致しないことが多い。それぞれの国に合った現実が、その国の今を創っているのであるから、日本の方法に頼るのではなく、まず任国を理解しようとする人としての視点が、高い専門技術よりも大切だと思う。

つまり、日本でイメージしたり推測したりするには限界があるので、自分の職種専門内容にあまり固執しないで、ゆとりのある構え方が大事だと思う。そのような、柔軟な姿勢が、現地の人に受け入れられて、しいては活動の目的を達成される鍵になると思う。

イ 日本での所属校と連携、交流を活発に行うつもりであったが、実際には想像していたようにうまくいかなかった。

月に一回から二回程度、ホンジュラス通信を郵送することを、帰国直前まで続けた。また、年に数回は写真で、現地の様子を子ども達向けに伝えた。しかしこちらからの一方的な発信で終わり、交流とまでにはならなかった。

派遣までに自分が想定していたような活発な活動はできなかった。まずは自分が現地の生活に慣れ、現地での任務を果たすことに精一杯になり、日本の所属校との連携

というところまで精神的に回らなかったことも大きい。

また、厳しいとは思っていたものの、想像以上に電気事情や電話事情が悪かったこともある。まず、任地でインターネットへの接続ができず、ホームページの更新ができなかった。また、治安事情から、ビデオやカメラなどの高価な機械類で撮影することに、非常な緊張が必要だった。そのため、想像していたようなビデオ撮影ができず、ビデオ便りの制作が厳しかった。

(3) 帰国後における精神面・語学面・日本との連携

ウ 学校の教育活動の中へいかに「国際理解」教育を組み込むか。

・日本の学校で行われている教育活動は多岐に渡っている。そのため、教員だけではなく子ども達へも負担を少なく、国際理解を組み込むか、その方法が課題である。また高学年や他校で進めている国際理解教育があれば、そこへどのように自分が関わられるのか、(授業者の思いや訴えたいことを尊重しながら)それも模索中である。

私は、協力隊活動を終えてから、「国際理解教育」や「国際交流」に対して、とてもシビアな見方をするようになった。それは、この2年間で大きく変わったことだと思う。そのため帰国後、国際理解教育に関わるときに、他の先生方とその見方のギャップを感じる時が多くなった。しかし、体験の有無に関わらず、私自身の感じ方が是であるとは限らないと思う。

根本的事柄であるかもしれないが、結局「国際理解教育」なるものも、授業をする教員の考え方の違いを受けるものなのだと感じる。しかし普遍的なものの存在を信じて、子ども達へのアプローチを行っていきたい。